

特集／障がいへの理解を深める <障害者週間：12/3～9>

こだわりの “授産製品”を広めたい

障がい者施設では、障がい者の就労意欲の増進や社会参加、自立した生活につなげるため、さまざまな授産製品(自主製品)の製作に取り組んでいます。

今回の特集では、市内の授産製品の魅力向上について検討するワークショップに参加した岐阜協立大学の学生代表3人のそれぞれの思いを紹介するとともに、市の障がい福祉に関する情報などを紹介します。

学生らが製品のアイデアなどを意見交換

授産製品(自主製品)の魅力や知名度を高めるため、岐阜協立大学の学生たちと市内3つの障がい者施設の担当者が製品の改良や周知方法などを検討する「授産製品魅力向上ワークショップ」が今年度3回開催されました。

参加者らは、学生ならではの視点と現場の担当者の視点でさまざまな意見を交わしました。

学生らは「授産製品をどう盛り上げるか」についても話し合い、消費者側の視点にとどまらず、障がい者が製品づくりにどのように深く関わることができるかにも着目し、アイデアを出し合いました。

年度内には、今回のワークショップで出たアイデアをもとに、製品の改良などの実践に移していく予定です。

製品の良さを伝えて応援を ～ワークショップに参加した学生の声～

ワークショップに参加した岐阜協立大学の学生3人。今回、障がい者施設の授産製品や障がい者について知ったこと、感じたこと、授産製品のPRポイントなど、それぞれの思いを聞きました。



経済学部公共政策学科2年
工藤鈴果さん



経済学部公共政策学科4年
北村瞭さん



経済学部経済学科4年
服部透也さん

Q授産製品を知っていましたか。どんなイメージを持っていましたか？

服部さん 私は全く知らなかったです。「授産製品」という言葉も今回初めて知りました。大垣市に授産製品を作るたくさんの事業所があり、幅広く活動されていることに驚きました。

工藤さん 私も今回初めて知りました。聞き馴染みがなかったのですが、商業施設などで授産製品と知らずに見かけたことはありました。

Q今回のワークショップで分かったことや発見はありますか？

北村さん どの事業者も製品をいかに売るのがかに頭を悩ませていることが伝わってきました。施設で働く利用者の皆さんが、働いた分のリターン(売上向上など)を得られるように応援したいと強く思いました。

服部さん 授産製品は製品自体に魅力があってもあまり知られていないのが課題だと思います。全く知らない人に魅力を知ってもらえるように、SNSの活用など時代に合わせたPRが必要だと考えました。



授産製品販売会の様子

Q障がい者や障がい福祉施設に対して感じたことはありますか？

工藤さん 施設として、授産製品を通して障がい者にいきいきと就労してもらうことや、やりがいを持って前向きに製品づくりができるように努力されているのが印象に残りました。



菓子の製造の様子

北村さん 施設へ見学に行ったときに、利用者の皆さんが一生懸命働いている姿を目にしたことで、自分も働く意欲を感じました。そういった作業風景を動画などで知らせていくことも必要だと思います。



農作物の出荷前作業の様子

服部さん 同じ一人の人間として、「障がい者」「障がい」というフィルターを取り除くため、子どものうちから障がい者と接する場があると良いと感じました。

Q最後に3人から授産製品のPRやメッセージをお願いします

授産製品は魅力あふれる商品がたくさんあります。そんな製品の中から、かわいいもの、おいしいものなど、自分が好きな製品を見つけて実際に購入してみたいです。そして授産製品でしか味わえない魅力を知ってもらい、一人でも多くの人にファンになってもらえたらと思います。

市内の授産製品(右のページに製品の一部を紹介)を購入することは、障がい者の社会参加を支えることになります。皆さんも販売している製品や活動を目にしたら、ぜひ手に取って、製品の良さを知るきっかけにしたいです。

製品の広まりが日々の仕事のやりがいに

ワークショップでは、利用者の皆さんそれぞれに、「お菓子作りがしたい、お菓子作りが好き」という気持ちがあり、日々一生懸命に取り組んでいることを伝えました。

製品が売れたり売れる場があるなど、自分たちが作ったものが広まれば、利用者の皆さんの働く意欲や日々の仕事のやりがいにつながります。

今回のワークショップで出た学生の皆さんのアイデアを受けて、商品のパッケージに利用者が描いた文字や絵柄を入れるなど、よりオリジナリティをもたせることで、親しみをもってもらえる製品ができたらと思っています。



ワークショップに参加した
かがやきネットワーク
尾崎 真哉さん